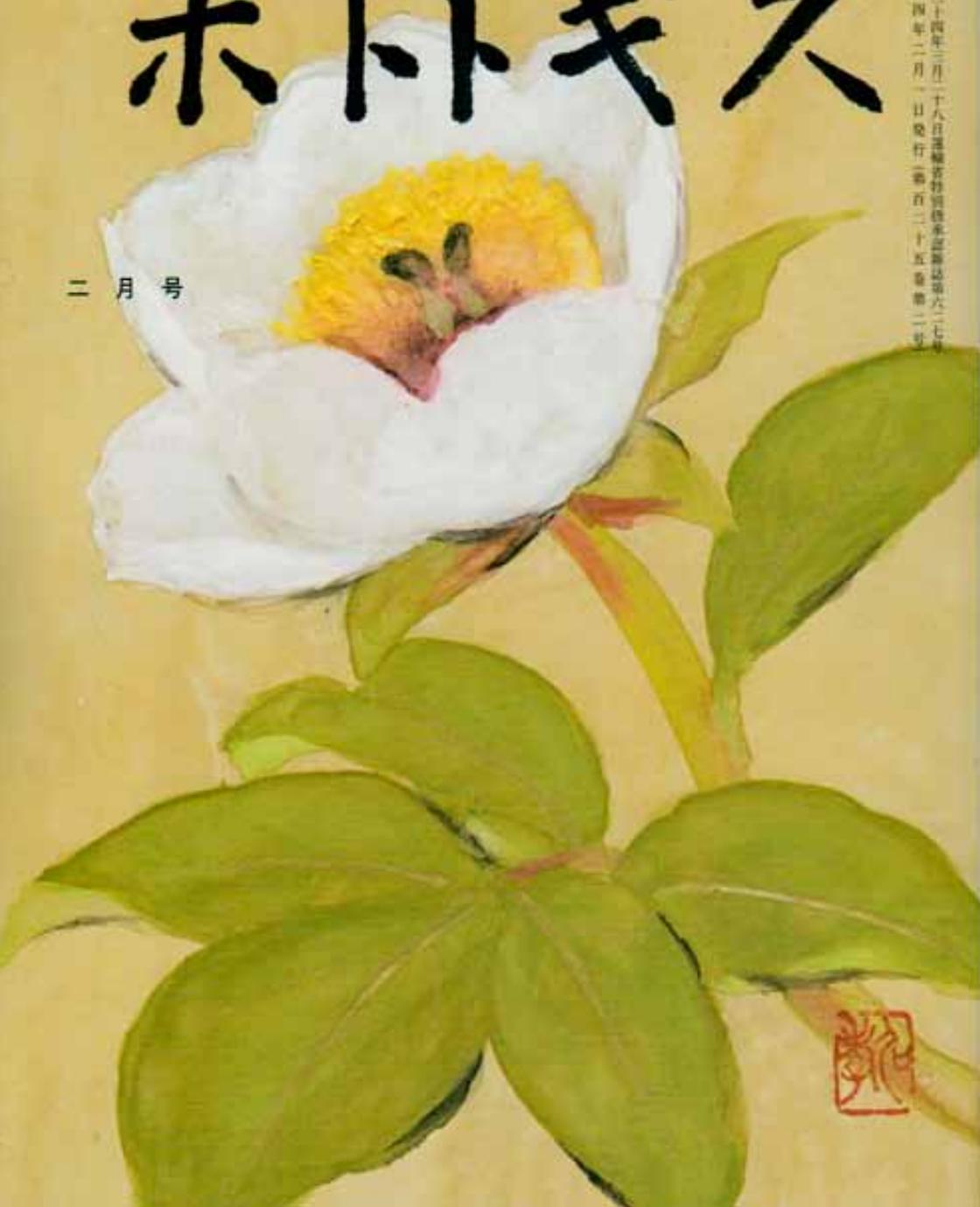


ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日出版  
全和四年二月一日発行  
第百二十五巻第二号

# ホトトギス

二月号



## 風雅の小筥（四十九）

廣太郎

先月は、ホトトギス発行所が明治三十年一月松山で創刊され、その後翌三十一年十月に東京に移つて最初の発行所が現在のホトトギス社からさほど遠くない東京市神田区錦町という場所であつた事までを申し上げた。その後は羅列になるが、同じ東京市で明治三十一年十二月という短期間で神田区猿楽町二十五、此処は明治三十四年迄居たが、その年九月には麴町区五番町三、四十三年十二月には芝区南佐久間町一一、大正二年五月からは牛込区船河原町十二にそれぞれ発行所を移している。御承知の通りこれらの住所は当時の表示なので現在では住居表示や番地は變つていて、なかなか現在の場所を特定するのは難しいのかも知れないが、読者の方で興味のおありの方はお調べ頂くのも面白いのかも知れない。

左記に羅列した発行所は、勿論オフィスビル等では無く、民家を活用して発行所としていたが、虚子は結構不自由を感じていた事は、遺されてくる文章等で推察する事が出来る。そんな折鎌倉の自宅で新聞を見てふと東京駅前に出来るオフィスビルのテナント募集の広告が目が止まり、即決したという事だ。そのビルの住所が東京市麴町区永楽町一一というものであつた。ちよつとピンとこないが、これこそ現在の東京都千代田区丸の内であり、丸ビルへホトトギス発行所が移る経緯である。そして大正十二年一月二十六日からこの丸ビルでホトトギス発行所は営業を開始したのである。以後は又来月をお楽しみに。

# 廣太郎句帳 廣太郎

令和三年二月一日 梅花奴一小選者吟

庭園の日裏を染めて梅早し

二月二日 カトリック新聞選者吟

雪見舟水尾肅々と進みゆく

二月二日 「河内野」新春を寿ぐ会不在投句

虚子の言信じて春を待ちにけり

冬薔薇恙の床を淋しめず

二月三日 NHK文化センター

冴返る山口の見えぬ闇にみ

黒猫の恋の相手はベルシヤかな

鯛を挿す湖北に嫁ぎ五十年

紅梅に空気濃くなる狭庭かな

下萌や地球を青く膨らませ

二月四日 蕉心会通信句会

百二十四年 ぶり立春三日

大川の水嵩といふ雪濁

残雪の富上は孤高に日を弾き

凍解に地球の自転極まれる

薄水や指に伝はる水の歌

春の霜都心に残る砂地かな

猫柳山の消息聞く流れ

冴返る窓全開の電車かな

春浅し都市モノクロに暮れてゆく

二月五日 六甲会

水菜切る音包丁の喜べり

富士凛と伊吹はでんと雪解風

白梅や庭師黙々もくもくと

東京の春一番を發ちて旅

山巒に色現れ初むる雪解風

大河へと雪解軍の旅一步

二月六日 菅屋ホトギス会

鶴塚に魂を鎮めて春浅し

汀子邸初音を癒えてゆく主

二月七日 野分会菅屋例会

狼名残山の消息響かせて

日輪のほほゑみに海苔干しにけり

狼名残命の重さ頂ける

海苔を掻くアクアラインを揺らしつつ

二月十一日 土筆会不在投句

浅き春合格通知待つ朝

いぬふぐり地球の鼓動伝はり来

春の風邪ワインの味に癒えゆけり

二月十五日 北國文芸選者吟

海苔干場日輪淡くほほゑめり

二月十六日 若水句会不在投句

明日の色点し初めたる焼野かな

春の風邪特效薬はやはり赤

雪解川分水嶺を明かしゆく

二月十八日 登高会

昨夜の星薄水磨き上げてをり

露の臺蝦夷の大地の目覚めかな

薄水の動きて地軸ずらしゆく

露の臺北国に色生れ初む

紅に日差集めて梅見かな

その奥の奥の裏まで梅見かな

紅白に順路狭めて梅見かな

二月十九日 廣邦会

待ち惚け紅梅の香の只中に

梅が香を纏ひ唇近付き来

凍ゆるむ富嶽全容正しつつ

二月二十三日 虚子生誕俳句祭

俳碑の文字より余寒解けゆく

二月二十四日 目黒学園句会

春の霜分子に還りゆく刹那

海苔を掻く東京湾の風を読み

春の霜色なき庭の色として

梅が香に取り残されてゐる二人

海苔干して江戸前の粹育てゆく

育ちゆくもの潤して春の霜

二月二十八日 青風会東京例会不在投句

雪解風富上湧水を躍らせて

西の旅春一番に背を押され

雪解川水尾曲線を描きゆく

夕星を誘ひ出したる邸の梅

凍ゆるむ大地奏でるコンチェルト

二月二十八日 野分会東京例会

有明の波の囁き海苔を掻く

山の神目覚めさせたる狼名残

銃声の潤み初めたる狼名残

# 雑詠 廣太郎 選

香水に手首の細くありにけり 澁川 木暮陶句郎  
 銀化せしホテルの鏡半夏雨 同  
 片陰をシスター風のごとくゆく 同  
 日常を切り取つてゆく秋日傘 大牟田 平井裕子  
 夜学子の使ひ込みたる参考書 同  
 虫の音に流されてゆく時間かな 同  
 柚子絞るつると種の転び出づ 東京 高濱朋子  
 天高し飛行機翼の緩みゆく 同  
 秋深し昔語りの姉妹 同  
 松の香を残して終へし松手入 川崎 横田美佐子  
 秋風や耳より醒めてゆく五感 同  
 宇宙船まで見えさうな十三夜 同  
 駅までのゆるき下りの月の道 東京 今井千鶴子  
 月の夜もひとりの窓に風の音 同  
 御料田の小さきに案山子大きかり 同  
 囀鳴く後ろ暗さの交じる声 大阪 酒井湧水  
 獣道行けば足裏に落胡桃 同  
 教科書を胸に夜学へ老オモニ 同

その人の胸にロザリオ鳥渡る 神戸 和田華凜  
 日に古色夕に古色や雁渡る 同  
 流木にいま月光の届きたる 同  
 丁寧に注ぐ一盃目新走 香川 湯川 雅  
 気付くともなく振向きぬ秋の人 同  
 つつと昇りて遅々として月渡る 同  
 団栗山はまほろばの躰にあり 奈良 古賀しづれ  
 縄文の世より神の座木の実降る 同  
 春日野の木の実が供物ことり塚 同  
 一筋の風より九月生まれけり 浜松 湖東紀子  
 触るる度こぼれて萩の盛りなる 同  
 引き潮の如き歳月こぼれ萩 同  
 まだ編まぬ母の遺句集小鳥来る 熊本 岩岡中正  
 ワクチンに肩出してゐる秋の風 同  
 ノモンハンてふ古戦場鳥渡る 同  
 澄む水は森の奥なる深山より 長剛 安原 葉  
 近づきし青鷺に青鷺追はれ 同  
 金風の江戸に出て会ふよき集ひ 同  
 雲払ひ夜々の月待つ空となる 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 待宵のすでに全き光かな 同  
 満月の消し残す星ありにけり 同  
 秋の海光の帯の揺れ落暉 神戸 涌羅由美  
 蕎麦の花揺れて真白き風の詩 同  
 蕎麦の花太白星に暮るる白 同

# 雑詠句評（一月号より）

## 蜻蛉飛び初めて昭和に戻る町

京都

山崎貴子

「蜻蛉」（とんぼ）トンボ目に属する昆虫の総称である。夏から秋遅くまで色々な種類を見る事が出来る。夏も見かけるが秋の季節となつている。

蜻蛉と言えば赤蜻蛉、赤蜻蛉と言えば童謡の「赤とんぼ」童謡の「赤とんぼ」と言えば昭和を代表する童謡である。大正十年三木露風作詞、昭和二年山田耕作作曲、昭和を生き抜いてきた誰もが一度は口ずさんだ歌である。昭和も遠くなりにはけり。既に昭和は懐かしむ時代になったと言う事である。

廣太郎主宰は、風雅の小管で季題についてご教示される機会が増えて来たように思う。ホトトギスは伝統を重んじる事に軸足を置いている。主宰の言われるように季題にはその起源がある事を忘れてはならない。近頃本来の主旨を離れて季題が独り歩きしている句を見掛ける。嘗ては多くいた注意してくれる先輩が今も少なくなつていく。力不足ではあるが私達がその年齢に達しているのかもしれない。嫌われることを覚悟で先輩から教わつて来た事を伝えておこうと思う。（青天子）

蜻蛉、特に赤蜻蛉が空に湧き出ると結構空の色が少し変わるようにも感じる。考えてみると、現在それほど蜻蛉が群れて飛んでいる情景は少なくなつてしまったのかも知れない。又そのような場面も、都会ではビル街が多く、昭和時代の家並を背景に飛んでいる情景が似つかわしいだろう。（廣太郎）

## 冷々と盆提灯の点りたる

袋井

湖東紀子

供養のために灯して精霊に供える「灯籠」の傍題は数多あり、ここで詠まれている「盆提灯」もその一つである。地方によつてさまざまな色や形があるようだが、灯がともされると辺りは、たちまちお盆の魂迎えのたたくまいとなる。「冷々と」が、いかにも盆提灯らしい哀愁を漂わせる。しみじみとその灯色だけを語つて、枯淡の一句に仕上がつている。（眞理子）

提灯というと、中で蠟燭等の火が燃えていたり、現代では電球を入れていてもLEDでは無い限り熱を発するだろう。それでも盃蘭盆というあの世からの人を迎える時期は、亡くなった人への思いが深まって、盆提灯も何か冷々と感じるのである。人を偲ぶ情景が見て取れる。（廣太郎）

天地有情

心子選

虚子塔へ連れ立つ小径草の花 長岡 安原 葉  
 峰寺やはやも冬めく風の音 同  
 病床の友を案じて春の昼 東京 稲畑廣太郎  
 草餅に山気練り込むより香る 同  
 落日に金に染まりし秋の海 鎌倉 星野 椿  
 高々と朝日を浴びて芙蓉咲く 同  
 明日香路の始りここに思草 神戸 和田華凜  
 文豪の庵整へて式部の実 同  
 八月十五日を生きて米寿なる 相模原 木村享史  
 終戦の日をまだ生きて水を呑む 同  
 月の供華なれば少々乱れても 神戸 三村純也  
 酌むうちに月もいざよひはじめたる 同  
 虫の夜の更けて届きぬ師の訃報 東京 山田閨子  
 虚子館へ続きし庭や萩白し 同  
 こぼれ種より朝顔の咲くところ 熊本 岩岡中正  
 門葉といふことばあり子規祀る 同  
 秋風や草の図鑑は妻が持つ 神戸 浜崎素粒子  
 杖ついて小庭徘徊草の花 同

父御座す靖国の杜秋彼岸 東京 河野昭彦  
 足重く秋分の日の九段坂 同  
 鉦叩音色違へて昼を鳴く 龍ヶ崎 今橋真理子  
 枯色を帯びて名残の萩となる 同  
 会はぬまま別れとなりて夜々の月 東京 今井千鶴子  
 月の夜も月のなき夜もひとりかな 同  
 新蕎麦と大書の幟よき日和 同 高濱朋子  
 小鳥来る窓べ親しき朝となる 同  
 横川の忌柿の秋なる仰木越 奈良 古賀しぐれ  
 虚子塔へ水の近江の今年酒 同  
 摘み束ね山里の香の月の供華 西宮 本郷桂子  
 高高としなやかに活け月を待つ 同  
 露の世や為残せしことなほ積んで 香川 湯川 雅  
 名月や退りゆきぬる星明り 同  
 添水の音庭の静寂のありてこそ 生駒 好川忠延  
 遠会 枳桜紅葉を掃きながら 同  
 秋灯を積み上げて副都心なる 浜松 湖東紀子  
 星を見ることなく閉ぢて花芙蓉 同